

## 第8章

### 若者の専門職希望に関する親の影響

データサイエンス学部 文岡 勝信

#### 1. 問題の所在

昨今、多くの若者が、将来不安を抱え、「夢・目標がない」といわれている。政府統計では、日本の若者は、諸外国の若者に比べて、「将来に対して不安を抱いている」人の割合が多いことが明らかとなっている(内閣府 2014)。近年は新型コロナウイルス感染症の影響や、長く続く不景気などの影響もあり、先を見通しにくいことも影響しているのではないかと考える。また、地方からの人口流出も昨今、話題に挙げられることが多い。その要因として挙げられているのが、経済状況と雇用環境である(総務省 2015)。つまり、若者にとって魅力的な就業機会が地方に不足していることが、人口流出の直接的な要因として挙げられる。

その中で今回注目するのが、若者の職業選択についてである。中高生の学生時代は、将来、社会に出て職に就くために、職業希望を模索し、そのための準備を始めていく時期でもある。その時期である高校生がどのような職業アスピレーション(将来、就きたい職業の志向性や希望)をもっているのかを、知ることによりよい雇用機会を目指せるのではないのだろうか。

以上を踏まえ、本稿では、こういった要素が長浜市の高校生の将来の職業希望に関係しているのかを明らかにしていく。続く第2節では先行研究と自身の知見を整理したうえで、分析するにあたり仮説を設定する。第3節では使用するデータと変数の選択、整理を行う。第4節では分析の結果を示し、第5節では分析結果より考察を行う。

#### 2. 先行研究と仮説の検討

##### 2-1. 先行研究

片瀬(2005)では、高校生の職業アスピレーション、特に専門職アスピレーション(将来、専門職に就きたいと考える意思)とその背景について述べられている。この研究のデータでは、90年代のデータではあるが、専門職の希望が最も多かった。この研究で専門職とは、「就くことが難しいが、就きたいと希望する職である」と述べられている。また、初職と到達職についてのアンケートもされており、専門職を初職に希望する生徒がその後も専門職を継続する志望が強いことが明らかになっている。さらに、高校生が専門職を目指すようになる要因として、元々は、出身階層や父親の職業などが主だとされていたが、近年のデータで、学業成績と通っている高校の偏差値が影響してきていると、実証されている。また、片瀬は、子と親のやり取りの影響力も本人の将来設計に影響を及ぼすと論じている

が、その点については明らかにされていない。

また、中澤(2015)では、中学生の進学希望意識について研究されており、男女差についても述べられている。この研究では、男子生徒よりも女子生徒の方が、母親と進路の相談をし、高い教育を求める傾向にあることが挙げられている。また、その相談の過程で、女子生徒の方が母親と、進路の一致率が高いと述べられている。ただし、母親と同性である女子生徒の方が相談の頻度が高くなるのは自然だと思われるが、一般的に男子の方が自立的な判断を求められる傾向が強いことや、女子の方が出産や育児など、ライフイベントで就業に影響を受けることが多く、女性のライフコースが多様かつ複雑になりやすいことから年長者の母親に助言を求めることが多いと考察されている。

## 2-2. 仮説の検討

以上の先行研究から、本稿では、「親から大学進学を勧められている女子生徒ほど、専門職を目指す」を設定する。これは、専門職希望の背景を探るものであり、片瀬(2005)では明らかにされていなかった、親からの影響を実証するものである。また、この仮説は中澤(2015)で明らかにされた男女差を実証するものでもある。

## 3. 使用するデータと変数

### 3-1. 使用するデータ

使用するデータには、「長浜市中高生調査（こども若者実態調査）」のアンケートデータを使う。調査の概要を表1に示す。

表1. 調査概要

調査名	長浜市中高生調査（こども若者実態調査）
調査対象	長浜市内の公立高校
調査時期	令和5年7月20日～9月11日
調査方法	インターネット調査（生徒に調査依頼および回答先のQRコード付き案内チラシを配付）
抽出方法	全数調査
サンプルサイズ	900

※調査の詳細は第1章に記載

### 3-2. 使用する変数

目的変数には「将来なりたい職業」を使用する。本調査では、自由記述で記入してもらい、それらを、職業分類コード(田辺・相澤 2008)を参考にコード分けし、8つ(専門、管理、事務、販売・サービス、熟練、半熟練、農林)に分類し、「わからない」や分類不可能のものを付け足した、9分類を作成した。後述のロジスティック回帰分析を行う際は、専門職とその他を見るために、「専門=1」と「それ以外=0」にまとめた。専門職の例をここ

であげておくと、「教師」「保育士」「看護師」「介護士」「プログラマー・エンジニア」などである（詳しくは本報告の補足資料を参照されたい）。

説明変数には、「親の勧め：大学進学」を使用した。この変数は、生徒に「両親（保護者の方）が、将来大学に通うことをあなたに勧めることがありますか」と尋ね、「1. よく勧められる」「2. たまに勧められる」「3. 全く勧められない」の3件法で尋ねている。ロジスティック回帰分析では、勧められる頻度がわかりやすくなるように、逆転して使用した。

また、説明変数から目的変数への説明の効果を正しくはかるために、統制変数として、次の変数を使用した。各生徒の学年それぞれ「1年生=1」「2年生=2」「3年生=3」と、所属高校を偏差値順に並べたもの（ここではA～F高とする）、そして家庭の文化資本の合計数を用いる。この文化資本の合計は、家庭に「自分のスマートフォン」「インターネット設備」「文学作品」「自分のパソコン」が家にあるかを尋ね、あると答えた項目を合計し、0～4の指標を作成した。

表2に使用する変数の記述統計量を男女別に示す。それぞれの変数の％は欠損値を除外した有パーセントを表示してある。ロジスティック回帰分析では最終的に市内在住の男子319名、女子372名のデータを使用した。

表2. 使用する変数の記述統計量

変数	市内在住の男子生徒 (n=319)		変数	市内在住の女子生徒 (n=372)	
		%			%
目的変数			目的変数		
なりたい職業9分類			なりたい職業9分類		
専門		23.9	専門		37.7
管理		2.3	管理		1.9
事務		0.6	事務		3.6
販売		0.6	販売		1.7
熟練		1.6	熟練		8
半熟練		0.6	半熟練		0
非熟練		1.3	非熟練		2.5
農林		1.0	農林		0.8
分からない_決まっていない		68.1	分からない_決まっていない		43.8
説明変数			説明変数		
親の勧め：大学進学			親の勧め：大学進学		
よく勧められる		39.7	よく勧められる		35.3
たまに勧められる		28.3	たまに勧められる		28.5
全く勧められない		32.1	全く勧められない		36.1
統制変数			統制変数		
学年			学年		
高校1年生		55.7	高校1年生		51.2
高校2年生		34.3	高校2年生		32.3
高校3年生		10.1	高校3年生		16.4
家庭の文化資本：合計			家庭の文化資本：合計		
0		1.3	0		0
1		8.6	1		4.9
2		38.4	2		48.1
3		38.1	3		35.9
4		13.7	4		11.1

注：高校の偏差値の変数は省略

## 4. 分析

### 4-1. 基本的な分析

統計的に有意差が確認できた親の影響と職業選択に関するクロス集計の結果について、男女別にそれぞれ図1・2で示す。

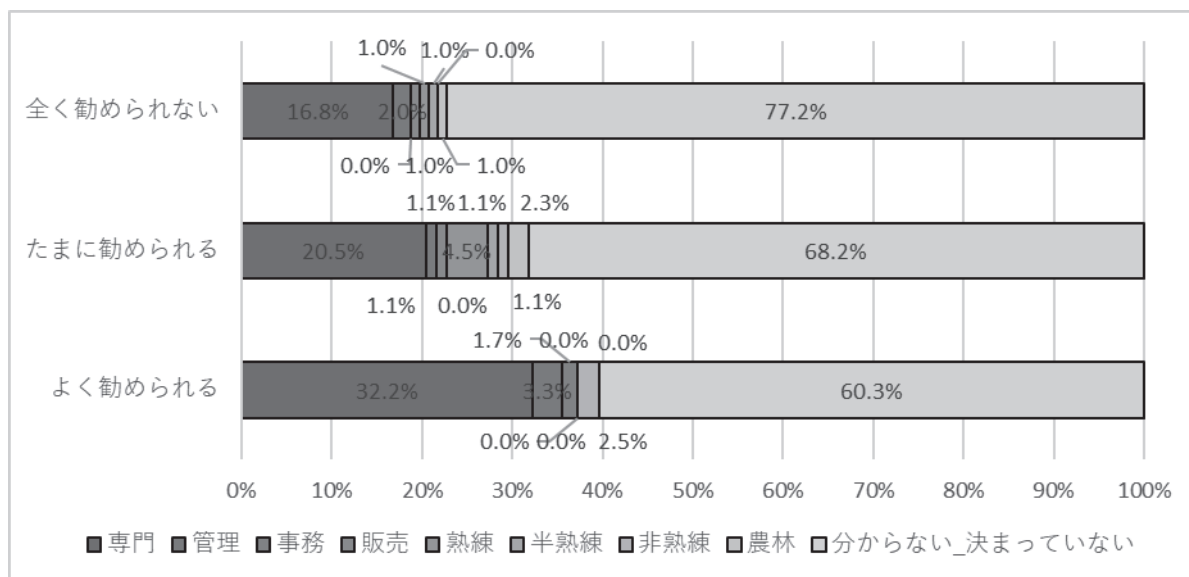


図1. 将来の職業志望と親の進学の勧めの関係(男子生徒)

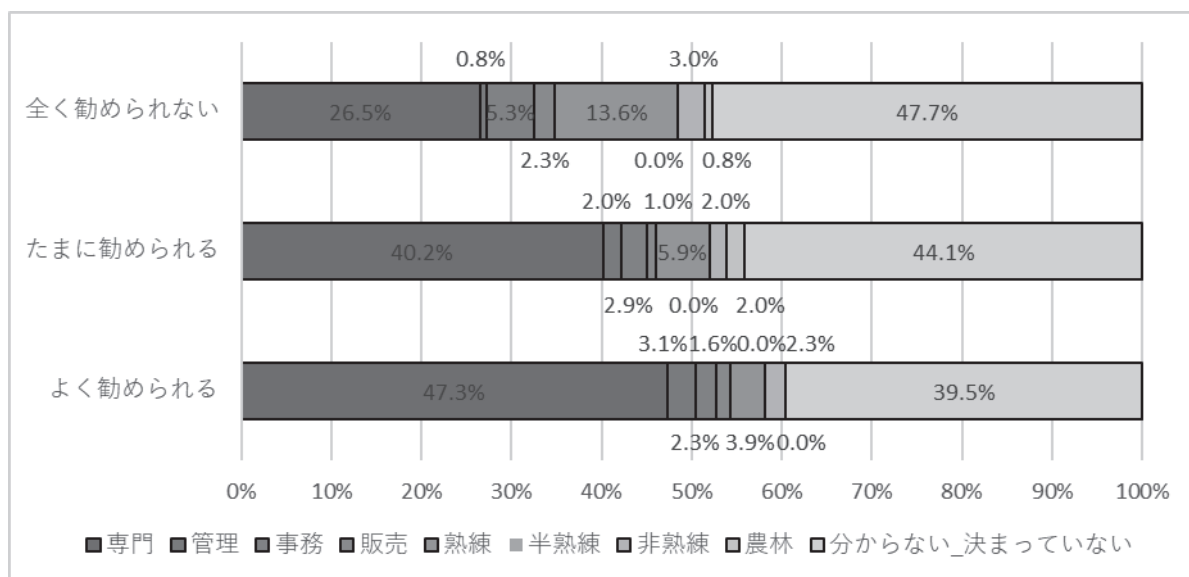


図2. 将来の職業志望と親の進学の勧めの関係(女子生徒)

それぞれの図の通り、専門職を選ぶ生徒(左端の一番濃い色)は、親に大学進学を勧められる頻度が高くなればなるほど、専門職を希望しやすい、ということがわかる。また、この分析では、それぞれ5%水準で有意となった。

#### 4-2. 多変量解析

クロス集計によって確認できた説明変数の効果が、他の変数で統制しても影響があるのかを男女別に二項ロジスティック回帰分析によって検討する。表4・5はその結果である。この表で比較すると、男子生徒の方の分析では、説明変数である、親の勧め：大学進学が有意にならず、女子生徒の方では、親の勧め：大学進学が5%水準で有意となった。この結果を受け、次節では考察を行う。

表3. 二項ロジスティック回帰分析の結果

変数	男子生徒				女子生徒			
	係数	標準誤差	オッズ比	有意確率	係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
親の勧め：大学進学	0.274	0.191	1.316		0.325	0.149	1.384	*
学年	0.071	0.206	1.073	*	0.158	0.149	1.172	*
高校の偏差値	-0.108	0.106	0.898		-0.172	0.091	0.842	
家庭の文化資本：合計	0.364	0.167	1.44		0.168	0.149	1.183	*
定数	-2.539	0.821	0.079	**	-1.396	0.685	0.248	
n	319				372			
Cox-Snell R <sup>2</sup> 値	0.044				0.054			
Nagelkerke R <sup>2</sup> 値	0.066				0.074			

注：\*,\*\*は5%、1%水準で有意であることを示す。

#### 5. 考察

本稿では、長浜市における高校生の男女の将来の夢に関する親の影響とその男女差について検証を行ってきた。その結果を考察する。

まず、全体の集計について考察する。冒頭に挙げた問題意識にあるように、自由記述での回答では「わからない・決まっていない」と答える生徒が男女ともに大半を占めていた。これに関しては、回答者に大学進学や就職など進路の問題に直面しているであろう、3年生の回答が他の学年に比べて男女ともかなり少なかった、という点と、近年のSNSなどの普及も含めた多様化の影響により、「夢＝職業」とは限らないようになっているのではないかと推測する。「平凡な人生でいい」というような考えがあるように、何か特別な職に就かなくても、“普通”に暮らしていければいい、というような考え方をする生徒も多くなっているのかもしれない。

次に仮説についての考察を行う。先行研究ではこれまでの研究で、出身階層や父親の職が子供の職業希望に影響を与えると考えられていたが、学校の成績や所属高校の偏差値も大きく影響しているとあった。今回は、統制変数で成績や偏差値を見つつ、説明変数である、「親がどれだけ大学進学について勧めているのか」の効果について検証した。結果とし

ては、前述の通り、女子生徒では有意な結果が得られたが、男子生徒のデータでは有意な結果は得られなかった。これは、中澤(2015)が論じるように、男子生徒は自立した判断が求められるといった点や、女子生徒の方が母親に相談しやすい、女子生徒の方が進路のイメージが一致しやすいといった内容も少しはあると考えるが、多くの原因は、まだ女性の職というイメージが強い、保育士や看護職を希望している生徒が女子に多かったことが挙げられる。先に挙げた例の中であれば、教師などは男女ともに人気、プログラマーは男子生徒に人気、後の看護職、介護職、保育士などの回答は女子が多く、この「女性の仕事」といったイメージがまだ残っているような職業が今回の結果に影響を与えたのではないかと考える。

最後に残された課題について指摘する。まず1点目は、多変量解析の改善についてである。今回は親の影響として大学の進学について勧められるか、という質問項目を用いたがこの変数で完全に親の影響をはかれているわけではない。そもそもの親子の会話頻度であったり、進路以外の相談もしているのかなど、親の影響は様々だろう。これらのことを踏まえ、再度、説明変数、統制変数を変更して分析を行う必要がある。2点目に、今回使用したデータの制約についてである。今回のデータは、滋賀県長浜市の一時点でのデータであるため、限定的な結果である。全国にサンプルを広げたり、継続的にデータを集めるなどすれば、より正確に職業選択とその背景について迫ることができるだろう。

## 6. むすび

本稿の調査では、高校生の将来の職業希望、特に女子生徒の職業希望には、親からの影響があることが分かった。多様化し、少し前とは全く違う職業が数年後には定着する世の中ではあるが、若者の未来についてより深く考えることで、日本が抱えている人口や働き方の問題などにも解決のきっかけが見えてくるのかもしれない。

## 参考文献

- 片瀬一男, 2005, 「夢の行方：高校生の教育・職業アスピレーションの変容」 東北大学出版会.
- 内閣府, 2014, 「平成 26 年度版 子ども・若者白書 | 今を生きる若者の意識——国際比較からみえてくるもの」, 内閣府ホームページ, (2024 年 2 月 4 日取得, [https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/124927443/www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/pdf\\_indexg.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/124927443/www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/pdf_indexg.html)).
- 中澤渉, 2015, 「進学希望意識はどこでうまれるのか? : 母子間における接触と意見の一致不一致に着目して」 中澤渉・藤原翔編, 『格差社会の高校生』, 99-114.
- 総務省, 2015, 「平成 27 年度版 情報通信白書 | 人口流出の背景」, 総務省ホームページ, (2024 年 2 月 4 日取得, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintoukei/whitepaper/ja/h27/html/nc231120.html>).
- 田辺俊介・相澤真一, 2008, 「職業・産業コーディングマニュアルと作業記録」 東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ.